2023 特別展記録資料

中村善策と加賀の北前船主・西谷家

Ⅰ 特別展記念講演会 （2023.10.21 開催） 抄録

北前船主・西谷家の人びと

高野 宏康

1．西谷調査の経緯

今回の展示は5代西谷庄八の娘である正子を中心に構成されています。私はこれまで埋もれていた膨大な資料を、手さぐりで発掘、紹介してきました、今日はその経緯と西谷家の人間模様についてお話しします。

私の故郷の橋立は、北前船主たちで構成されていた村で「北前船主集落」といい、かつて“日本一の富豪村”と紹介されたこともあります。西谷庄八の邸宅と私の実家は近所でしたから、子どもの頃から 7 代目の方と顔見知りでした。1980 年代には寂れてしまい、住民は殆どがサラリーマンで、港が近くにあるわけでもなく、漁村でもない。船主の家も空き家になっている。1980 年代に私の父の世代が、それを何とか活用して橋立を活性化しようと、全国に先駆けて北前船主の家を資料館にし、まちづくりを始めました。こういう動きは小樽と似ています。

今回の主人公・西谷家は、小樽倉庫を創設した人々です。小樽の倉庫群を手掛けたのは北陸の人々が非常に多く、日本遺産認定の5件全てが北陸の北前船主によります。それらの資料は小樽に残っておらず調べるためには故郷に行かなければなりません。橋立に今も西谷家の屋敷があり、20 畳の大広間に和室が連なる、橋立の北前船主邸に特徴的な建築様式となっています。その屋敷内には多数の資料が残っていました。小樽倉庫を作った人は誰かという問いに、真っ先に上がるのは西出孫左衛門の名で、次に西谷庄八が出てきますが、倉庫を作ろうと発案し実際に建設、運営したのは西谷庄八です。西出孫左衛門は本家にあたり、北前船主としての規模は非常大きく、加賀の 4 大船主、全国有数の船主でした。西谷庄八は資本を持っている西出家に出資を依頼し、非常に仲の良い共同事業者でした。調査を進めるにあたって、西谷家に関係する方々に出会ったことで、新たな事実が判りました。

加賀の西谷家には 1 万点以上の資料があり、あまりに物量が多いため調査はいったん保留になっていました。前小樽市総合博物館長の土屋周三氏が、7 代西谷庄八（一正）と深い交流があり、2011 年に亡くなる際、土屋氏に資料整理を託されました。それで、2017 年に、土屋氏の北前船の調査団体、小樽商科大学、全国北前船研究会などとともに共同調査をスタートさせました。それまで、断片的な西谷家の人物録はあったものの、基本的な概要、どんな家なのか全く分かっていませんでした。西谷家の社史冊子の発見を目標にしたところ、意外にあっさりと確認でき、それによって西谷海運以前からの歴史がわかりました。

2018 年の 2 次調査では、函館在住の 5 代目庄八のひ孫、西谷正也氏が加賀市を訪ねて来られました。この方は西谷正子没後、夫の進の再婚相手ゆきゑとの間のご子息で、幼い頃小樽に暮らし、西谷家に対する思いの深い方でした。同年の 3 次調査で中村善策の肖像画 2 点を発見し、「善策」のサインを見て、慌てて市立小樽美術館に確認しました。同年 9 月に同館でお披露目されています。調査が可能になったのは、加賀市在住の 5 代西谷庄八のひ孫・本瀬熙子ご夫妻が調査に理解があり何度も協力下さったお陰です。西谷家と西出家の関係も詳しくわかり、資料のなかに西谷家の人びとの写真を多数確認しました。

2018 年秋、4 次調査で偶然お墓参りにいらしていた佐野禎子氏に出会いました。西谷明子のまとまった資料があると伺ったため、早速兵庫県宝塚市のお宅を訪問すると、

高野宏康
Takano Hiroyasu
1974 年石川県加賀市橋立町に生まれる。1997 年明治大学文学部卒業。神奈川大学大学院にて歴史民俗資料学の博士号取得。
2008 年災害史における関東大震災後の資料調査研究プロジェクトに参加。2013 年地（知）の拠点整備事業を受けた小樽商科大学に赴任。2015 年グローカル戦略推進センター地域経済研究部学術研究員。2023 年同大学客員研究員。

加賀の北前船主集合写真　明治 19（1886）年 12 月 9 日　小樽で撮影
前列左より赤松清三郎、5 代西谷庄八、浜中八三郎、後列左より増田喜三郎、
4 代広海二三郎、11 代西出孫左衛門（個人蔵）

実に沢山の写真とそれに添えた西谷明子による詳しい情報の書き込みがあり様々な謎が解けました。

北前船主の集合写真には、西谷庄八、西出孫左衛門ら小樽でお馴染みの顔ぶれが揃っています。並び方で中心にいるのは西谷庄八で、非常にリーダーシップを発揮していたことが分ります。この写真の内容を牧野隆信先生は「錚々たる若き船主たちの物語を知る写真として感銘深い」と、高く評価しています。北前船主の肖像写真は、大成後の老年期の写真が多いのですが、このような若い時に小樽に来ていたことがわかってきました。西谷明子が結婚の際に、中村善策から贈られた油絵は、橋立の泉の浜を描いたもので、佐野氏所蔵の品です。

2020 年 8 次調査が終了後、2022 年に資料は加賀市に寄贈されました。北前船の里資料館で全体のごく一部が展示されましたが、今後も順次一般公開されるでしょう。

２．西谷家の人々①（初代～5 代目）

初代庄八（荘八郎、文化元年・1804 年没）は、もともとは武士でしたが、武家生活を嫌い先祖と関わりのある「西谷」を名乗り、宝暦 10（1760）年海運業を創業。以後代々北前交易を営みました。自分の家を宝暦荘と呼んでいます。初代の長男庄九郎が本家の西出家に婿養子に入り、西谷家初代の息子が、西出家を継ぐという関係になっています。2 代目庄八（荘市郎、文政 8 年・1825 年没）は、幕末動乱期の当時ロシア人が松前に来訪したことをきっかけに蝦夷地に注目、航路を開きました。3 代目庄八（荘五郎、安政 2 年・1855 年没）は、さらに航路を拡張し九州各地に寄港しました。4 代目庄八（荘八、明治 13 年没）は、所有船を和船から合子船に転換。続いて西洋型帆船を導入。経営近代化を進めました。小樽へ進出していったのは、近代化に成功した船主が多いです。5 代目庄八（万延元年・1860 年生まれ、昭和 8 年・1933 没）が小樽に進出しました。明治 9（1876）年 16 歳のとき父の所有船に乗り、北海道と関西方面を航海。明治 13 年父の死去に伴い、20 歳で家業を継承。明治 19 年小樽で加賀の北前船主と記念撮影したのが 26 歳の時です。明治 22 年に小樽に進出し支店を開設しました。物産部と海運部を設置し、旗印を「＝」（ニビキ）としました。明治 23 年には、30 歳で同郷の北前船主、西出孫左衛門と小樽倉庫を設立し、西谷家の最盛期を築きました。

３．５代目庄八の小樽進出

5 代目庄八が最も小樽と関係が深く、明治 13 年父の没後 20 歳で家業を継ぐことになり、加賀の北前船主仲間で小樽進出を計画し、小樽で記念写真を撮影しています。北前船主のレジェンドが集まった写真（明治 19）には、西出孫左衛門、増田倉庫の増田さん、浜中家という有力な船主が揃っており、集まって小樽で何をやろうかと考えていたことが伝わってきます。

実際に小樽支店を開店したのは明治 23 年（22 年の記録もある）、29 歳の時です。汽船を導入したことで、商品の取引を物産部、運賃積みで荷を運ぶ海運部の二つに分けて経営しています。小樽進出はちょうど北前船が変化していく時期でした。西谷の旗印の二引きをデザインした社章も作られています。古く遡ると、西出家・西谷家のルーツは、戦国武将の片桐家や朝倉家にも繋がっているという記録があります。

また北前船主は小樽には住まなかったと言われていますが、5 代西谷庄八は小樽の水天宮の近くの相生町に屋敷があって、小樽と橋立を半年ごとに行き来しており、小樽の暮らしに非常に深くかかわった船主でした。5 代庄八は自分の失敗談をまとめた、本人の肉声が伝わる文章をたくさん書き残しています。成功者ですが何度も失敗を重ね波乱万丈の生活を送り、そのことを事細かに書いています。明治 10 年の小樽の印象は、今日では想像もできない程の寒村、一漁村でしかなかったが、土地の情勢にも通じていくと、小樽に望みがあると思われた。江戸時代は道南中心で周りからは、函館出店でなく何故小樽なのだろうと思われていたが、「私は決然小樽に店舗を置くことにした」と、それが明治 22 年のことです。埋め立てが進み、倉庫が作られるようになり、5 代庄八は小樽の発展を担う存在になっていきます。一連の倉庫の建設を奨励し資金を集めて、本港の一大工事を起こした、これはすべて西谷庄八が行ったことで、明治 27 年その功績が讃えられ、感謝状が贈られています。しかし大正期の書籍『小樽』（1914 年）の小樽倉庫の記述には西谷庄八の記録がなく、山本九右衛門が創設したと記載されており、以前のことは忘れられたのだと思います。

小樽に進出して 2 隻の汽船「北海丸」と「小島丸」を導入したので、莫大な荷物を保管するため、小樽に大きな倉庫が必要になりました。小樽倉庫は北前船主が近代化していったことを示しています。本州に残っている土蔵とは規模が違います。西谷家の特徴は取次業務である回漕に力を入れ、回漕部を作ったことです。「本家（西出家）は資本を出してくださる。私は実務をやる」という 5 代庄八の言葉が伝わります。単にモノを置いておくだけでなく、営業倉庫といわれるように、荷物を担保としてお金を貸す「金融機関」の役割を果たしていました。

西谷回漕店、右側は小樽倉庫。明治 20 年代

相生町の西谷邸から小樽港を望む

当時の貸付担保は米だけで貸付率が低かったため、商人たちは大変不便にしていました。小樽倉庫はどの船で到着した荷でも、たばこなどの商品でも貸付ができた。これが画期的なところで、今の倉庫とはイメージが違います。5 代庄八自身、「小樽倉庫は自分の事業の中で良い仕事だった」と振り返っています。

鯱（しゃちほこ）の乗っている明治 20 年代の小樽倉庫の写真にある、隣の建物は今残っていません。現在、消防犬ぶん公がいる広場は非常に重要な場所で、かつて西谷回漕店がありましたが戦時中、道路拡幅で取り壊されました。紆余曲折があって 5 代庄八の経営期間は短く、ドイツの汽船会社との訴訟で、西谷の経営は疲弊しました。また、到着した小豆の荷が全滅するなど、トラブルが重なり、事業整理に追い込まれ、明治 29 年に倉庫を譲渡してしまいます。以降、自力で船を持つのをやめて、回漕部だけを残し西谷回漕店にしたのです。事業は弟の正吉に任せ、5 代庄八は引退させられ大阪に引っ越しましたが、北前船主の広海家が銀行や保険に関わっていたため、庄八も日本海上保険の取締役になることができました。このような形で小樽を離れたため、明治 30 年の小樽商工会議所創設時に西谷庄八の名前が出てこないのです。

7 年後の明治 36 年に、正吉の病死により 5 代庄八の復帰が叶います。日露戦争で樺太の南側が日本の領土になり、同地での事業を請け負ったことが、西谷家にとって功を奏し立ち直りの契機になりました。一方、明治 38 年に松前から小樽に拠点を移した山本家が、正式に小樽倉庫の経営に当たります。この間も横領事件や、美唄炭鉱 36 鉱区を断念し三菱に引き継がれるなどの出来事がありました。

西谷家は色々なところにどんどん進出していくという気風があり、樺太開発を長官から依頼され、大泊に鉄道と連結できる素晴らしい倉庫を建設し奇跡的に成功したのです。神戸、釧路に支店を構え大正 11 年には西谷海運株式会社と会社組織にし、事業は急成長を遂げます。自社の船を持たず、藤山汽船部、北日本汽船、大阪商船など日本を代表する汽船会社の代理店を委託されて、「東洋一の回漕店」と呼ばれるまでに成長しました。小樽だけでなく、留萌や釧路にも出張所などがありました。

5 代庄八は、汽船を自分で導入するなら余程大きな事業でない限りは持ちこたえられないと考え、多額の資本力を要しないエージェント（代理店）システムをいち早く導入し、他人の船の代理店業務で取引を行いました。その近代的な経営は高く評価されました。

社員にも執務時間を厳守し勤勉さを求め、おもてなしの心という社員教育を行ったことが、当時の小樽便覧や人物録に登場しています。稲垣日誌にも西谷海運の待遇が出ており、非常に良い就職先だったようです。5 代庄八には小樽を発展させなければならないという意識もありました。

昭和初期に相生町の別宅を撮影した写真があります。小樽港が見え下のほうは堺町なので、現存する板谷宮吉邸のイメージに近いと思いますが、5 代庄八は実際にそこで生活していました。西谷家の事業は回漕店以外に天狗山の農場や、鉄道貨物と連結させた海陸運輸の会社、北都組を経営していました。北前船主は鉄道の普及で没落したと言われますが、そうではなく、北都組を通じて鉄道と船舶を扱う関連会社や日本郵船と専属契約を結んでいました。

4．西谷家の人びと②

続いて西谷家の濃厚な人間模様についてお話しします。

6 代庄八（正治）の代で海運業者としての西谷家は終わりを迎えます。5 代とはビジネスに対する考え方が根本的に違っており、芸術に造詣が深く文学にも詳しく、画家の中村善策や彫刻家の中野五一を支援して小樽の文化に貢献しました。

ポートレートのとおり、西谷正治は、光源氏と呼ばれていたと伝えられるほどの貴公子です。西谷海運の監査役を務めましたが、幼い頃から病弱で実務ができないことから、後継者は別な方にと自分でも思っていたため、妹の正子を大学の後輩である西川進と結婚させ、跡を継いでもらいたいと願っていました。

たくさん残っている西谷家の写真は、正治が撮影したもので、カメラの専門知識がありました。自分に思うところがあり芸術家を支援した人で、5 代庄八とは違う道を歩みました。父と対立し海運から撤退して事業を潰したと伝えらます。

左から 6 代西谷庄八（西谷正治）、12 代西出孫左衛門（西出悌二）、西谷正子　1917 年

正治の妻となった貞子は、加賀藩家老の加賀八家の一つである前田孝の次女でした。前田家から西谷家に嫁ぐというのは凄いことだと言われています。結婚の際に中村善策は、前田貞子とその母の肖像画を描いています。善策が人物画を描くのは大変珍しく貴重な作品です。

西谷正治の妹、つまり 5 代西谷庄八・和喜の長女である正子は、正治よりも 12 歳年下で、中村善策と同い年でした。正子も前田家から嫡男の嫁にという打診を受けますが、西谷家としては正治が家を継ぐのは難しいため、正子に分家させるということで丁重に断りました。正子は婿を迎えることになりました。石川県能登にある松任の地主の三男である西川進を養子に迎え、進は神戸支店に勤務して新生活が始まりました。進は早稲田大学の正治の後輩で友人でもありました。

西出孫左衛門、西谷正治、西谷正子のいとこ同士 3 人で撮影した大正 6（1917）年の写真からは、当時の青春群像が伝わってきます。年齢を重ねてからの写真では関係性が分かりにくいですが、中央の西出悌二が第 12 代西出孫左衛門を継ぎます。

西谷正子と結婚した西谷進について説明します。正子はスペイン風邪のため 19 歳で亡くなってしまうため、進は別な方と再婚します。いっぽう、正治は体調が回復してきて自ら仕事をはじめ、進と意見が合わなくなり、事業を巡っては父の 5 代庄八とも対立しています。正治には大正デモクラシーの影響がとても強く、メーデーに参加したことが知れて、資本家として問題だと周囲に思われてしまいました。正治、進、5 代庄八はそのような緊張関係にありました。進は、海運に対する造詣が深く、正治は哲学的組織性があり、経営は堅実で安泰だとされていましたが、そのあと大変なことになります。

正子と進の出会いは、大正 2（1913）年頃、進が正治の病気見舞いに橋立の家を訪問したときで、橋立の写真館で記念写真を撮影しています。その後恋愛に発展して結婚することになり、続いて神戸の写真館で撮影しています。結婚の時に使用した櫛かんざしが、この度展示されています。

こちらのかんざしは、西出家出身の 5 代庄八の妻・和喜が使用したものです。前刺しは非常に繊細な家紋入りの装飾が施され、正子の遺児の明子と洋子がそれぞれ一本ずつ譲り受けました。

一対あった七宝焼きの銀杯は結婚の引き出物で、正子の孫にあたる禎子のお食い初めに用いられました。かんざしの千鳥は正子が非常に好きだったデザインだそうです。12 代目の悌二の結婚の際にあつらえた水晶の櫛かんざしは、西出一門の女性が揃えて着用しました。

中村善策は幼い頃から才覚があり、大正 5（1916）年に西谷回漕店に入社しながら、三浦鮮治の主催する洋画研究所で絵画を学ぶのですが、大正 6（1917）年に神戸支店に転勤を命じられる。神戸からも洋画研究所に出品を継続しています。

西谷正治は彼の才能を認め支援していて、神戸時代にも手紙のやり取りが認められます。善策が神戸支店に勤めていたころ、スペイン風邪が大流行した時期で西谷家でも次々と亡くなる方が出ています。正子と進が結婚し長女明子が誕生、そして第 2 子を身籠っているなか、正子自身がスペイン風邪にかかり出産後 15 日で亡くなってしまいます。善策もスペイン風邪で危篤状態となり、後遺症で左足関節炎を発症して小樽に戻っています。戻ってからは税関の仕事をして、再び絵を描く情熱が生まれ洋画研究所に通い、地獄坂にある西谷家の山荘に籠って絵を描いています。その努力の甲斐あって二科展に初入選を飾ります。

善策は西谷家に対する恩、子どもたちのことも決して忘れませんでした。それが、正子の遺児・明子が結婚するときに贈った油絵に繋がっていきます。正子が亡くなり二人の遺児たちは、祖父母の 5 代庄八と妻・和喜が育てます。和喜の手作りという洋服は斬新なデザインでパールの首飾りも使っている。祖母として大切に育てたいという愛情が伝わってきます。

善策は、大正 15(1926)年にかけて一気に画力を蓄えました。西谷家の山荘で絵を描きまくり、疲れたときには正治から借りた文学書を読み耽っています。絵があるから山荘生活に孤独は感じなかった。そして翌年、富山出身の彫刻家中野五一を頼って上京します。中野は博物館本館のクロフォード像を制作した人です。

続いて善策は昭和 3（1928）年に結婚のために一時帰郷しますが、西谷家の若竹の工場跡地の空き家を使って新生活を始めました。夏に若竹の家からの眺望を描いた絵があります。これらのことは西谷正治との手紙のやり取りに綴られており、西谷家は中村善策の大いなる後ろ盾でした。

花嫁姿の西谷明子（西谷正子の長女）　個人蔵

西谷家霊廟　加賀市

石川県山代温泉の社員旅行の写真に、5 代庄八、正治、進、社員たちが写っています。非常に緊張感がある時期です。このような渦中で 5 代庄八が亡くなり、小樽、橋立、大泊で同時に告別式が行われ、新聞も数十社報道していて、西出孫左衛門、6 代庄八（正治）、前田孝、親友の広海二三郎、大家七平が名を連ねる葬儀広告が出ています。葬儀の弔辞に北日本汽船の野村治一郎が、「北前船時代より海運に功績があり」「小樽港の開発に尽力あり」と讃えています。北海道で北前船の呼称はあまり使われていなかったとされますが、庄八は自分のことを北前船主と名乗ったことから、弔辞にも使われています。

橋立の北前船主が眠る墓地のなかで、西谷家の霊廟は別格で、神殿のような形をしており、観光資源になっても良いような場所です。昭和初期のアールデコ調、小樽の洋風建築デザインの影響を受けています。霊廟の隣には庄八・和喜夫妻が二人並んでいる胸像があります。銅像制作で夫婦揃った胸像は非常に珍しく、5 代庄八が妻と一緒に歩んできたという思いが良くわかります。これを作ったのも彫刻家の中野五一です。胸像制作には藤山要吉ら小樽を代表する財界人、北前船主の広海二三郎、大家七平、右近権左衛門らが尽力しました。台風で肩部分が破損した際、作り替えたので、この胸像のオリジナルは小樽市総合博物に展示しています。

偉大な 5 代庄八の没後、正治は観光業や飲食業というモダンなビジネスに関心があったため、札幌で“ホテルの気品とカフェの和やかさの中間を行く”というキャッチフレーズのカフェ三条、ミカドホテル、続いて小樽では温泉を開業し、昭和 11 年に新会社・西谷商会を設立します。一方明子は大家七平ら北前船主の応援を受けて、回漕業を継ぎ、大二回漕店を創業するのです。その渦中、今度は明子の後見であった進がカリエスで急逝してしまいます。

正治の事業が崩れるのは早く、すでにこの頃、正治宛の催告書が届いています。土地開発の新会社「北方日本株式会社」を作ろうと目論見ました。しかし病気が悪化したこともあって膨大な事業を整理し、正治一家は小樽から橋立に戻り、金沢に転居して療養しました。正治は新しい思想「生活改善運動」に深く入り込んでいて、自分の会社をそれに沿わせようとし、北前船主たちを怒らせ、身内の西谷家の人々の気持ちもどんどん離れ崩壊していきました。

昭和 12 年の納税額を示す資料を見ると、1 位は板谷宮吉、2 位野口喜一郎、3 位木村円吉とあり、その時の西谷の位置は 74 位と、5 代庄八の頃よりかなり後退していると考えられます。西谷家では、正子の遺児・明子の存在が重要になります。

明子は、妹とともに 17 歳まで加賀の橋立で 5 代庄八夫妻に育てられました。高校は加賀の大聖寺高校から、庁立小樽高等女学校に転校し同校を卒業。後に独立して大二回漕店のオーナーとなりました。昭和 16 年、大二回漕店を閉業して、元西谷海運社員で北日本汽船株式会社の水島弘に嫁ぎます。明子は、西谷家の歴史、変わりゆく西谷家を何とか伝承したいという思いがあり、今回の展覧会に繋がっています。

中村善策が絵を贈ったのはこの時です。この海岸は橋立の人にとっては特別な場所です。海水浴の思い出がある砂浜はだんだん失われ、この場所を選んだ中村善策の眼は流石です。

7 代庄八（一正）は、旧制小樽中学（現小樽潮陵高校）に学び、早稲田大学卒業後昭和 11 年西谷海運に入社し樺太支店に務め、小樽と樺太を往復する生活でした。明子とは大変良い関係で、小樽から西谷海運は無くなりましたが、橋立に戻られてからは西谷の邸宅を使った恵比寿亭という料亭やホテルを経営され、観光事業を展開されました。私の実家と近いため面識がありましたが、このような背景を背負っている方とは知りませんでした。歴史を伝えるために資料を残し、小樽にも様々な資料を寄贈してくださいました。

5．まとめ

明治 20 年代以降に小樽を拠点に活躍した西谷家は、新たな時代に対応した「近代発展型北前船主」で、新しい事業を展開、小樽で一年の半分を暮らしその発展に尽くしました。6 代庄八は事業を衰退させてしまいましたが、中村善策はじめ小樽の芸術家を育て支援した功績があります。

西谷正子の遺児・明子は 5 代庄八の思いを受け、西谷家を通してみた北前船と小樽発展の歴史、再発見の一つのきっかけを与えてくれました。女性の力、芸術の力を感じさせます。西谷家と中村善策の関係は、港湾都市小樽の経済と文化の結びつきの在り方を示し、象徴となる事例です。

中村善策油彩画「泉浜潮吹」　昭和 14（1939）年　個人蔵

５代西谷庄八曽孫　佐野　禎子

西谷正子の遺児たち
1924 年大聖寺で撮影
長女明子（右）5 歳、次女洋子（左）4 歳。

17 歳まで二人は祖父母（5 代庄八・和喜）に育てられた。ドレスは和喜の作品。スカートの裾にタックを取り、成長に合わせて長くしている。共に長いパールのネックレスを着用。

明子の嫁入り道具

明子の花嫁衣裳、調度品等は 5 代庄八夫婦が早くから準備をしていた。それは、庄八が早世した上の弟正吉（亡くなった時迄、西谷海運を名実共に任されていた人）と、故正子の墓を守る分家設立を孫の明子に託してのことだった。

候補の地所と倉は、和喜の母西出寿美の実家“角谷（かどや）”の跡地で、“角谷の倉”には正子の思い出の品全てと、分家用の調度品が選び抜かれ納められていた。和喜は時折見せる度説明をしてくれたと言う。

所が、祖父庄八が明子分家の手続前に死亡した為、それら全てが法律により、長男正治伯父の所有物となった。それを知った庄八の友人達*が、明子のために正治伯父を提訴し、裁判を手伝った。女学生だった明子は、「六法全書」を抱いて寝たという。“角谷の物”は得られなかったが、明子は勝訴して 17 歳で分家し、父・進を後見人として、新設“大二回漕店”のオーナーとなった。会社の支配人には庄八が育てた元社員が就いた。

明子はその後も西谷本家の人々と仲良く交流し、特に 7 代庄八（西谷一正おじ）とは兄妹のように互いに歴史をひもといて、助け合っていた。

＊北前船主の大家七平、広海二三郎らを示している。すでに、5 代西谷庄八は明子を後継者として、周囲にお披露目の紹介を済ませており、彼らは庄八の意向を充分に理解していた。

妹 洋子の嫁入り道具

1920 年 2 月、スペイン風邪流行時、生後 15 日で母正子を失った洋子は、5 代庄八夫婦の元で手厚く育てられ、一歳になった頃、乞われて庄八の親友の一人、大阪の豪商、片山和助氏の後取り娘夫婦の養女になった。

その時のことを二歳の姉明子が鮮明に記憶していた。
洋子が今までに見たこともなかった白い着物（橋立では赤ちゃんの時から白紋付も用意する習慣があった。）を着て、乳母に抱かれ、人力車に乗って行ったまま帰って来なかった。そして洋子は養女になる時に、西谷の家紋の入った嫁入道具一式も揃えて持って行った。

所が一年程で養家に実子が生まれる事となり、彼女の行く末を案じた庄八の意向で、養子縁組を解消した。洋子は沢山の玩具と共に橋立に戻って来たと言う。その時、持って行ったお道具一式は、洋子が長じて結婚した時の嫁入道具になった。

片山家の若夫婦は、その後もずっと洋子を懐かしみ、大切にし、娘時代最後の旅行中にもわざわざ神戸まで会いに来て下さった。

MEMO

母明子が 2017 年 1 月 3 日、97 歳で召された後の家の片付けで、昔を偲ばせる家具があった。中央に大きな金色の葉なしの茶の実の家紋の付いた黒塗りの桐箪笥（洋子用）と同仕様の大きな長持ち（明子用）が、戦火と度重なる転居の害にも免れて残っていた。

母の花嫁衣裳は、父の妹達が使った折り、雨に遭遇したようで、沢山の黄色い染みが出来てしまい、片付けの時に処分した。その中で一本の帯紐だけは、数奇な運命を辿る事になる。帯は、巾五センチ程の白地に銀色の鶴が連なって織り込まれていた。それは母が自ら仕立て、「死に装束」として準備していた風呂敷包の中にあった。意外にも清楚な銀鼠色地に紺一色で野の花をあしらった湯衣に添えてあった。

父との再会を心待ちにしていた母の心情を、子として嬉しく思いつつ感謝して棺の中に納めた。

歴史の中の取るに足りない様な布切れ一片にも、膨大な物語が潜んでいます。知れば知る程「？」の数が増えていきます。物事を断言出来ないと悩む人程、ターゲットに近い人なのでしょう。

取り留めも無く書きましたけれど、良い時間を頂きました。感謝。

佐野禎子
Sano Yoshiko

5 代西谷庄八曽孫。1942 年西谷明子と水島弘の長女として東京で誕生。父弘は元西谷海運 KK 社員、西谷進が入社面接をした。その後北日本汽船、商船三井へと移行。禎子は佐野長茂と結婚。夫に伴い NY、デンバー、カラカスに在住。兵庫県宝塚市居住。

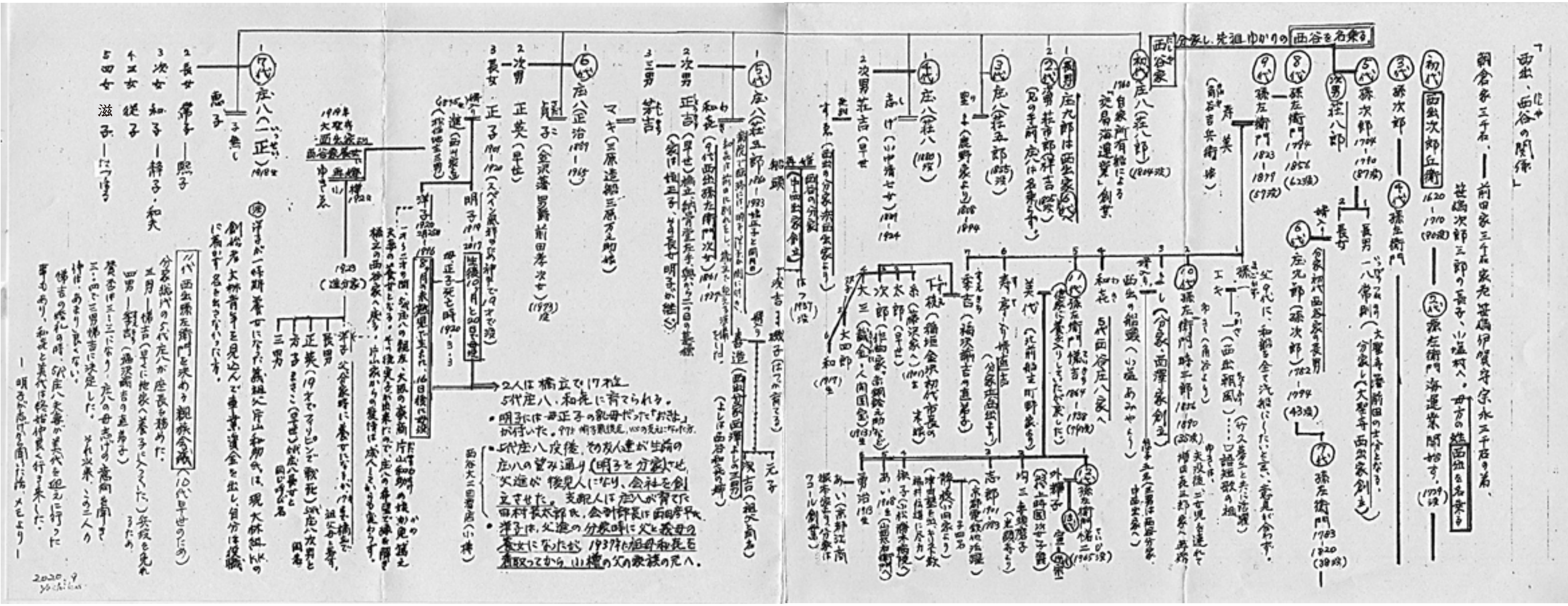
＜中村善策の神戸時代と西谷家の出来事年表＞

	中村善策（1901-1983）	西谷正子（1901-1920） と娘たち	西谷家の人々（小西出律・西谷正治ほか）
1901	中村善策　小樽に出生。 建築請負業中村駒吉・カツの四男。9 人兄妹の大家族に育つ。	西谷正子　橋立に出生。 5 代西谷庄八・和喜の長女。西谷正治の 12 歳年の離れた妹。	小西出家は、5 代西谷庄八の妻・和喜の実家、西出家最古の分家。 小西出律（こにしでりつ）は、早くに両親を亡くし、5 代庄八夫婦が吾が子のように、正子とともに育てた。
1916	●15 歳で西谷海運 KK に入社。（小樽） 勤務のかたわら、小樽洋画研究所に学ぶ。	●長男・正治の次に生まれた正英が早世したため、特に可愛がられて育った。 ●この頃前田家より、嫡男（貞子の兄）の嫁に正子を迎え入れたいと打診があるが、5 代西谷庄八は「娘は婿をもらい分家させる」旨を伝え断った。 ●もう一方、兄正治は、早稲田の後輩の松任の地主三男・西川進と妹の結婚を勧めていた。	●小西出律は英治を入り婿に迎え、英治は西谷海運神戸支店に勤務する。
1917		●1917 年 12 月 10 日正子は西川進を婿に迎える。 ●西谷進神戸支店勤務。	●1917 年 9 月　西谷正治（のちに 6 代西谷庄八）は、金沢藩家老男爵前田孝の次女・貞子を妻に迎える。小樽勤務。
1918	●1918 年　西谷海運本社から、神戸支店へ転勤を命ぜられる。 ●働きながら絵を描き、神戸 YMCA 外国語学校で英語を学ぶ。	●この頃橋立では、真夏に正子の従弟・西出悌二（のちに12代西出孫左衛門）の婚礼があった。 婚礼の様子は、西出大三（截金/人間国宝）のエッセイの中に記されている。 その日のために、正子の提案で「水晶の髪飾り」を特注したところ、女性たちが気に入って同じものを揃えたという。（髪飾り一式あり）	●神戸では 5 代庄八の末弟・芳吉一家が、母・志げを看ながら支店を支え、西谷正子、小西出律の家族も近くに住み、幸せに暮らしていた。 ●1918 年　西谷正治・貞子夫婦に、長男・一正（いっせい）誕生。
1919	●スペイン風邪で亡くなった小西出律・英治夫妻の葬儀に参列。	●1919 年 4 月 11 日神戸にて、正子夫婦に長女明子が誕生する。	●1919 年　スペイン風邪の大流行時、小西出律・英治夫婦が罹患し、一人ずつ 2 日に渡って逝去。2 人の葬儀は、一緒に神戸の寺院にて行われた。（神戸支店社員参列の写真あり）
1920～	●1922 年　善策自身もスペイン風邪に罹患し、後遺症で左足関節炎に冒され、その後神戸から小樽へ帰り、絵画に専念する。兵役検査は丙種となる。（上京前の半年は、5 代庄八所有の別荘をアトリエにする） 神戸時代に起きた出来事は、未だ 19 歳の善策にも厳しいものだった。同年齢の正子の死。残された生後 10 か月余りの明子、生死をさ迷っていた緑児、洋子の事は、心に深く刻まれた。 ●1924 年　彫刻家・中野五一を頼り上京。 ●1928年　木下舞子と結婚。帰郷し、西谷海運の好意で小樽市若竹町の胡南荘に住む。	●1920 年 2 月 15 日　第 2 子を妊っていた正子が、スペイン風邪に罹り、8 カ月の洋子を早産。（神戸） ●1920 年 3 月 3 日　正子出産後 15 日でスペイン風邪で他界。 ●まだ保育器もない時代、5 代西谷庄八はすぐさま次の行動を取った。 広域看護婦会から 6 人を雇い、2 人ずつチームにして2時間交代で洋子の鼻先に貼った灯芯を頼りに、息の有無を計った。乳母は旧制灘中教員婦人が引き受け、毎朝人力車で迎え、お弁当を用意して夕方送り届けた。 ●ひと落ち着きした 2 児は、そのまま橋立で祖父母（5 代西谷庄八・和喜）に育てられる事になる。 明子には、母正子の乳母だった“おきよ”がばあやとなり、洋子には“ねえや”と和喜が付き添った。 ●1921 年　西谷進は、5 代庄八の意向を入れ再婚。 ●1923 年　進夫婦は分家。 洋子はこの時、名前のみ養女として父の戸籍に入る。 ●明子はいずれ分家して、母・正子の家を継ぐよう、戸籍も 5 代庄八の孫のまま残される。そのために、沢山のことを学んだ。 ●明子は 17 歳で小樽へ行き、1939 年父・進の看病をし、最期を看取る。 ●洋子は 17 歳まで橋立に居て、祖母・和喜の最期を看取ってから、初めて小樽の家に入る。	※本年表は、5 代西谷庄八曽孫・佐野禎子氏作成の年表に基づいています。
1940・1941	●長じて、明子 22 歳、結婚の年、小樽にて善策が祝いとして明子に、「泉浜潮吹」の絵画を手渡した。 ●すでに 5 代西谷庄八夫婦も他界していたが、正子・明子・洋子と続いた命の繋がりを心から喜んで、5 代庄八への感謝と明子の門出を祝し、1 枚の油絵を贈ったのである。	●1941 年 6 月　明子結婚。 ●1941 年 8 月　洋子結婚。 結婚祝いの絵画「泉浜潮吹」を手渡してくれたときの善策は、“優しいオヒゲのおじさん”だった。 明子は「中村善策は平和な絵を描く画家」と家族、子どもたちに伝えている。現在もその絵は、西谷庄八曽孫・佐野禎子氏が大切に保管している（本展出品作）。	

2023 特別展記録資料
「中村善策と加賀の北前船主・西谷家」

市立小樽美術館
〒047-0031　小樽市色内 1 丁目 9 番 5 号
Tel 0134-34-0035 / fax 0134-32-2388
発行：　2023.12. 15

西出家・西谷家関係　家系図（佐野禎子氏編）



晩年の５代西谷庄八（中央）↑を囲みて

西谷正子　1901−1920

西出悌二
西出孫左衛門（12 代）
1965 年没

西谷正治
西谷庄八（6 代）
1889−1956

西谷和喜（5 代西谷庄八夫人）
9 代西出孫左衛門次女

西谷庄八（5 代）
1860−1933

西出孫左衛門（11 代）
1864−1938